

世日クラブ 講演要旨

台湾を築いた明治の日本人

拓殖大学前総長 渡辺利夫氏

世界日報の読者でつくる世日クラブ(会長 近藤謙良・近藤フランニクス代表取締役会長)の定期講演会が17日、動画サイト「YouTube」のライブ配信を通じて行われ、拓殖大学前総長の渡辺利夫氏が「台湾を築いた明治の日本人」と題して講演した。渡辺氏は台湾の近代化のために尽力した人々の業績を紹介し、「日本人は台湾の開発や近代化、または文明化のために必死に取り組んだ。そういう日本人の中に明治という時代の精神が、最も鮮やかに浮かび上がる」と強調した。以下は講演要旨。

日本による統治以前の台湾は清国の領土だったが、日清戦争で負けた清国から日本に割譲された。

当時の日本は欧米の国々から見ればまだ小国で、文明化されていない国と見られていた。そんな小国の日本には、海外領土の経営・開発のできるはずがないと思われていたのだらう。

しかし、日本の指導者は台湾でも日本と同様の殖産興業を行い、台湾を日本本土と同じレベルにまで引き上げること、日本が文明国であることを列強に知らしめるチャン

と捉えた。台湾にきた明治日本人の中にはさまざまな人間がいたが、今回は磯永吉と八田與一という二人の人間に注目していきたい。「蓬莱米」という米の名前を聞いたことがあるだろうか。これを開発した人物が磯永吉だ。20年以上もかけて、

寝食を忘れるほどの努力の結果、生み出された米の改良品種である。当時、台湾はもとより日本市場でも一世を風靡した高収量品種でもある。話が現代に飛ぶが、以前のアジアは人口過剰により、十分な食糧を供給できない貧困地域だった。ところが、19

を嘉南平原に少しずつ流していくというシステムを生み出した。中央山脈の南端に幹線水路を張り巡らし、わずかな勾配を使って水を均等に行き渡らせた。この巨大な灌漑計画は、日本はもとより世界でも有数なものだった。1936年に米国のフーパーダムが完成するまで、このダムが世界で最大だった。計画には幾多の困難があった。トンネル工事中にガス爆発事故が起きたり、こんな危険なことほもうやめよという脅迫に近い指示も出された。

公的意識が生きがいに 「日台交流基本法」制定を

60年代末から70年代の初めにかけて、アジアでは「緑の革命」と呼ばれる米の高収量品種の普及・拡大運動が始まった。食料不足であったアジアが、現在ではほとんどの国で米の生産余剰国になっている。この大事業の原点は、実は台湾で開発に成功した蓬莱米にある。

また、この建設の途中で関東大震災が起き、予算が大幅削減され、それに伴う従業員の大量解雇もあった。八田はこのいすれをも克服し、ダムを完成させたのだ。この建設を通じて、八田の実力は多くの人から認められるようになった。太平洋戦争中も各地のプロシエクトに関わることになり、フィリピンでの綿作の灌漑を命じられ、各分野の技術者たちと一緒に出港した。だがその途中、八田の乗った船は米国の潜水艦に撃沈され、部下ともども死亡してしまっただ。56歳だった。



一人の「忘れられた日本人」杉山龍丸という人物の熱意あふれる努力により、蓬莱米は、インドの飢餓地域である北西部のパンジャブ州に移植され、そこでさらに改良を重ねられた後、フィリピンに渡った。そこで一層の改良が加えられ、周辺アジアの国々へと普及・拡大していった。もし磯による品種改良がなかったならば、今もアジアの国々は飢餓状態にあった可能性がある。

台湾のため、多くの苦勞と自らの人生の大半を捧げた彼らの姿を通じ、浮かび上がった。大量の水を確保、その水

わたなべ・としお 拓殖大学前総長、元学長。昭和14(1939)年、山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。同大学院経済学研究所修士、経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て拓殖大学に奉職。専門は開発経済学・現代アジア経済論。(公財)オイスカ会長。日本李登輝友の会会長。平成23(2011)年、第27回正論大賞受賞。